



絶縁から始めよう

萩野律（きょうだいの立場、子どもの立場）

依存と攻撃でつながる家族

共働きの両親、私と弟の4人家族でした。

父は結婚前から依存傾向やパーソナリティー障害に類する対人関係の課題があったようです。記憶をたどれば、母は尻ぬぐいに奔走し、その愚痴を聞かされていたような気がします

が、私が記憶を閉ざしてしまっただせいかおぼろ気です。

父の言動は共感性に乏しく、他責他罰が顕著で、つねに因縁をつけられ、否定され続けたことは覚えています。また、実直に生きている人や障害者を侮辱することを平気で口にする一方、熱心に労働運動や政治活動に参加して正義を振りかざすアンビバレンツ⁽¹⁾な人でした。

4歳下の弟は、幼少期から突発的、爆発的に暴れることが多



注(1)愛情と憎悪、尊敬と軽蔑などの相反する感情を同時に持つこと

く、就学前に特別なケアが必要という診断もあったようです。親の意向で小・中学校は普通クラスに通いました。LD(学習障害)がありますが、課題としては発達障害よりパーソナリティー障害に近い気もします。

当時から母への暴力とおそろく動物虐待もありました。高校生活も一人暮らしもうまくいかず、二十代半ばから実家で社会的ひきこもりの状態です。母の給与や退職金から毎月数十万円を受け取っていたそうで、母の貯金がいくら残っていたかは知りません。

問題を先送りにした「つつけ」

高校卒業後に上京していた私は十年ほど前から帰省を拒絶さ

れるようになりました。「退職後の人生をかけて(父と弟を)なんとかする」という母の言葉には共依存やカサンドラ症候群⁽²⁾の傾向が表れていたと思います。

事が動いたのは6年前、母がステージⅣの診断で直腸とS状結腸の全摘手術を受けることになった時です。

依存傾向の強い父から「俺を見捨てるのか」と診察に行くことを止められていたようで、全身に転移して激痛でどうしようもなくなつてから病院へ運ばれたそうです。

すぐに手術の準備に入ったものの、状況を悲観した父が母の手術の3日前に遠く離れた町の海岸で殺虫剤を飲みました。一

命はとりとめ、私が病院へ向かうと、ベッドに拘束され、シヨック症状で震えながら、うわ言を言う父の姿がありました。

母へは「仕事が忙しく手術に立ち会えない」とうそをつき、父に付き添うことになりました。そうこうするうち、両親という攻撃対象を失った弟のターゲットが私となり、父の病室内で携帯着信とシヨートメッセージを昼夜無関係に延々と受け続けることとなりました。

最初は対応しましたが、パー

ソナリティー障害傾向の人の攻撃の爆発力、恐怖の与え方と執拗さはなかなかのもの。私自身が自分の人生を了解した瞬間でした。

その時の私が決めること

母は4年半前に亡くなり、私が喪主として式を行いました。私が喪主として式を行い、その翌日を最後に、「8050問題」の典型となる父と弟とは会っていません。明確に離れることで、やっと依存や攻撃の背景にある彼らの事情を少し理解できた気がします。しかし、要望があったとしても、彼らと関わるか否か、それはその時の私が決めることだと考えています。ただ対応能力がないからです。

タイトルは「絶縁」を勧めてくれるわけではありません。私自身を慰撫、もしくは鼓舞するための言葉です。また「絶縁で終わりにしよう」ではなく「始めよう」であることも申し添えておきます。

注②発達障害の伴侶に生じる二次障害。当事者との情緒的な相互関係が築けないために身体的・精神的症状が現れる